

「奈義町横仙歌舞伎への誘い」 レポート

令和6年11月24日（日）開催



① 奈義町横仙歌舞伎の解説

P 3



② 奈義町現代美術館

P 10



③ 集合写真&歌舞伎べんとう

P 13.14



④ 美咲町大坪和西棚田

P 15

はじめに

令和6年11月24日（日）快晴 午前8時 岡山駅西口バスターミナル出発

人文知探訪プログラム「奈義町横仙歌舞伎への誘い」を開催しました

【講師】

- ・ 一般社団法人林原美術館 館長 谷一尚 氏

車中では、横仙歌舞伎の演目についてご解説をいただき、内容を理解して心地よく歌舞伎を堪能することができました。

- ・ 奈義町現代美術館 学芸員 遠山 健一朗 氏

雪化粧と虹のかかる雄大な那岐山を背景に、作品と建物が一体化した現代アートについて解説をいただき、五感で楽しむことができました。

- ・ 美咲町大埴和西棚田保存地区連絡協議会公認ガイド 宮尾 廣実 氏

収穫が終わった棚田では、冬衣装に着替えた案山子が出迎えてくれ、田園景色に癒されました。棚田保存についてのご苦労や、地区の方の暮らしなど、一同深く心に残るお話をいただきました。

～ 旅行会社(株)美袋交通様による安全第一のバス旅で、楽しくたくさんのお話を学んだ一日でした ～

① 8:00 岡山駅西口を出発 車内にて横仙歌舞伎の解説

企画委員を含め、計 33 名が参加いたしました。今回のプログラムは当初募集人数が 15 名でしたが、予想を上回るお申込みをいただき、急遽大型バスへ変更して開催することとなりました。

岡山駅から奈義町現代美術館へ向かう道中、講師の谷一林原美術館長から開催のご挨拶がありました。

谷一館長「本日はご参加くださりありがとうございます。岡山県の北では、この土曜日、日曜日がちょうど岡山県森の芸術祭の最終日の 2 日間になります。1 番最後の土日とあって、昨日も本日もたくさんの方が県北へ足を運ばれるのではないかと思います。まず我々も、私の盟友である岸本館長が勤めている奈義町現代美術館に参ります」

「その後、すぐ向かいに奈義町文化センターがありますから、今回のメインである横仙歌舞伎を観劇します。実は横仙歌舞伎は今春にも数人下見に行きました。演目はもちろん今回とは違うのですが、それは松神社にあります歌舞伎舞台で行われました。その時の客席は早い者勝ちで、早く行けば良い席が座れるけどもってというような感じだったのですが、今回はあらかじめ奈義町の方のご厚意で 33 名分の席を用意いただいております。春は幕の内弁当もいただきまして、もう昔の歌舞伎弁当を彷彿とさせるようなすごい量でした。地元の仕出し屋さんが精魂こめて作られている手作りのお弁当です。今回の昼食はそちらのお弁当もお楽しみいただけますよ。そして、最後は紅葉と冬枯れの棚田を見て帰ろうという構想であります」

本日観劇する横仙歌舞伎の歴史について解説がありました。

谷一館長「それでは、横仙歌舞伎について資料を作っておきましたので、ご覧ください。県内に残る地下芝居と申しますが、田舎歌舞伎ですね。これが江戸時代末ぐらいになりますと非常に盛んになりまして、例えば小豆島にもありますし、日本各地に芝居ができます。その伝統がそのまま残されている地域が日本全国に随分ありまして、奈義町の横仙歌舞伎もそのひとつになります。幕の内弁当についても、いろんな形のお弁当、たとえばお重箱の 3 段重ねのお弁当とか、そういうのを今でも出しているところまであります」

「公演者はみんな地元の方たちで、子供たちに技術を伝授しながら、子ども歌舞伎も一緒に行うというのが基本的なパターンであります。このような地元歌舞伎の、秋の大公演最終日をご覧くださいということです」

「歌舞伎の保存会がございまして、江戸時代から途絶えることなく続く横仙歌舞伎の保存のために、1966 年、昭和 41 年に奈義町内の有志によって発足いたしました。この地域出身の東京都で警察官をしておられた方が退職後戻ってこられてきて、本物の歌舞伎をお江戸でご覧になっていて、それを地元を持ち帰り熱心に活動されたということのようです」

「発足 30 周年の 1996 年（平成 8 年）とその 4 年後の 2000 年（平成 12 年）に、奈義町が歌舞伎専門職員というのを行政として採用いたしました、お 2 人いらっしゃいます。すごいことですよ。

それぞれの方がプロの演奏家のもとで 2 年間 専門研修を積んで、保存会の一員として活動されているということでもあります。町を挙げての支援があるということでもあります。文化を残すということ、奈義町は一所懸命やっておられます。素晴らしいことです。」

「子ども歌舞伎教室も開講されていて、その積極的な取り組みが注目されているところです。 11 月の 2 日間にわたる大公演を中心に、1999 年（平成 11 年）から四季の公演と題しまして、年間 4 回の定期公演をやっておられます。 中島東地区に、江戸末期の 1846 年（弘化 3 年）に建てられました歌舞伎専用の舞台があります。江戸時代の歌舞伎専用舞台がそのまま残っていて、これが県指定の重要文化財の松神神社の歌舞伎舞台です。我々が今春訪れたのもこちらでした。中島東地区というところにありますが、松神座として毎年 4 月 29 日に公演をしておられます。 舞台の保存を通じて、地下芝居の伝統をそのまま継承されているということです」

「2020 年（令和 2 年）には、舞台に隣接の古民家を改築した松神館という展示館と簡易博物館も開館いたしました、歌舞伎資料の展示や稽古もここで行われています。 それ以外にも、夏は高齢者施設へ出張慰問公演をされますし、冬も奈義町文化センターで他の団体と共催して小さな文化祭を開催されます」

「横仙子ども歌舞伎教室は、横仙歌舞伎の後継者育成と歌舞伎の指導を通じて、保存・伝承の基盤づくりを目的に 1996 年（平成 8 年）から開講されています。 役者だけでなく裏方まで含めて全員子どもたちで務めておりまして、今年の公演は小学校 2 年生から中学 3 年生まで 9 名全員が参加しているそうです。すごいことですよ。指導者のもとで、秋の公演に向けた練習を夏休みから重ねておりまして、 本日その成果を披露するということでもあります」

「奈義町の小学校は、小学校 3 年生の総合的学習の時間に全員で歌舞伎を学習されておりまして、歌舞伎の歴史、楽器、衣装など本物の道具を間近に見るほか、全員が白浪五人男のどこかの役に挑戦して、参観日には雨傘を振り回して保護者の前で上演するというような授業も行われております。今春もこの松神神社の歌舞伎舞台で白浪五人男を披露してくれましたね」



「地下芝居の最大の魅力というのは、知っている人が役者になっていることで、誰々さんがこの役をしているということですね。そして自分も舞台に出ることができるという身軽さにあるわけです。 伝統として守るべきものは守り、変えるべきところは変えて、楽しんでくださる多くの方々のため、そして次の世代を担う人々のために新たな1歩を生み出そうとする意欲的な試みとして高い評価を受けておりまして、今日はその一端を皆さんにもご覧いただくということでございます」

歌舞伎の楽しみ方についてもご紹介がありました。

「本日の公演では、株式会社松竹の脚本家としてご活躍されている戸部和久さんが、司会と解説をしてくださいます。これから私が説明すること以外にもいろいろお話が聞けるのではないのでしょうか。やっぱり歌舞伎は、解説がないとなかなかわかりにくいです。だから歌舞伎座のオーディオガイドではその日ごとに細かい解説をしてくれまして裏話も含めて説明がされますから初心者の方はぜひそういうものを使っていたきたいですね。本日はその代わりに戸部さんがご解説されるということだと思います」

「まず、子ども歌舞伎教室の成果となるひとつめの演目ですが「菅原伝授手習鑑車曳」ですね。そして昼食休憩をはさんで、大人の方々がされます、中島東松神座による「玉藻前旭袂道春館の段」です。そして最後に「墨染鬼三穂太郎譚」という、横仙歌舞伎保存会の方の演目です」

続けて、ひとつめの演目「菅原伝授手習鑑車曳」の段について解説がありました。

「菅原伝授手習鑑というのは、1746年の作であります。劇中では菅丞相となっておりますが、菅原道真のことです。大宰府左遷を題材にした浄瑠璃大作であります。1746年、47年、48年と3年続けて浄瑠璃大作が3つありまして、これが現在でも3大作と言われております。その最初がこの菅原伝授手習鑑ですね。そして義経千本桜、仮名手本忠臣蔵へ続きます。これらはものすごく長い話になっておりまして、例えば東海道中四谷怪談などというのも、実はこの仮名手本忠臣蔵の中の別のエピソードですね。そういう形でいろんなエピソードがありまして、江戸時代の人たちは時間がありましたから、朝から晩まで通して全編をご覧になっていたということです。今はそのうちの有名な段だけ抜粋してやるというのが一般的となっております。

「作者は当時人気の3人の作者が合作で書いておりまして、二代目竹田出雲、三好松洛、そして並木千柳という人気3大作家の合作でございます。文楽で大当たりすると、すぐにこれを歌舞伎で上演するのです。文楽というのは人形使いと演奏者が別々。歌舞伎でも演奏者は別々ですが、文楽の場合は、セリフは太夫が義太夫節というので語るわけです。ですから原型がそのまま保存されて現代でも演じられています。もちろん人形の表現とかは、誰がどういう風に工夫してやっているとかはありますが、それは細かいところでありまして、基本的に文楽は全く変わらないのです。この文楽から歌舞伎に移すと、あらすじは一緒ですけど、人形ではなく役者がそのままセリフも言いますので、その役者独自の工夫が入りますからどんどん変化していくのです。

話の大筋は変わらないけれど、歌舞伎は変化していく。これを誰がどういうふうアレンジしたか、リフォームしたかっていうのが面白い歌舞伎の見どころの1つにもなっております。誰々の版バージョンをそのまま演じるとか、そういう面白味がでできます」

「ひとつめの演目ですが、菅原伝授手習いですから、これは寺子屋のことです。当時寺子屋が大ブームでございまして、しかもこれには3つ子が出てくるのですが、当時天満に3つ子が生まれまして、その3つ子の工夫が入りますからどんどん変化していくのです。話の大筋は変わらないけれど、歌舞伎は変化していく。これを誰がどういうふうアレンジしたか、リフォームしたかっていうのが面白い歌舞伎の見どころの1つにもなっております。誰々の版バージョンをそのまま演じるとか、そういう面白味がでできます」

「ひとつめの演目ですが、菅原伝授手習いですから、これは寺子屋のことです。当時寺子屋が大ブームでございまして、しかもこれには3つ子が出てくるのですが、当時天満に3つ子が生まれまして、その3つ子の話が話題になって、それがすぐ歌舞伎に取り入れられたのです。それから心中事件が起こると、その心中事件を題材にして文楽や歌舞伎に改作してしまうとか、そういうことが江戸時代は行われていました。だから庶民は、実話が元になっていることが分かることもあるようでした。今の我々になるとそこがなかなか難しいところではあります」

「これは三つ子それぞれに桜・梅・松の名前が与えられておりまして、いろんな事情から敵と味方に分かれて 舞台が進行していきます。この辺のところはちょっと複雑なので、多分松竹の方が分かりやすく解説してくださいでしょう。それぞれの事情で3つ子が敵味方に分かれて、元上司のためにわが子を犠牲にする、元部下とか夫婦とか、義理と人情で板挟みになる人たちの話でありまして、時代を超えて共感を呼んだのです。これも武士の世界の話ですが、それを町人が劇にして面白く楽しむというものです。歌舞伎も文楽も元々はそういうところから発達してきましたからね」

「寺子屋の段では子供がたくさん出るのですが、子ども歌舞伎は大体寺子屋の段が有名なのですが、今回はその寺子屋の段ではなくて車曳なので、車曳が行われるところが見どころの1つです。3人の双子がまだ別れる前で、独立した人気演目となっております。勇壮な3つ子が揃う車曳は、これもまた名場面で見応え十分で、子供たちの練習の成果を見てください。奈義町の子供たちがどう演じるのか、小学校、中学校の9名の名演技をどうぞお楽しみください」



続けて、「玉藻前旭袂道春館の段」についてご解説がありました。

「これは全5段構成で、玉藻の前とは九尾の狐です。化け狐の九尾の狐です。それが様々な時代に災いをなすべく化けているというような話です。初段は天竺、つまりインドの話で、2段目は唐土ですから中国ですね。各地で九尾の狐が暴れ回りますが、この初段と2段の玉藻の前は舞台設定も難しいのか、今ではほとんどなくなってしまいましたね。戦前はまだ演じられていたようですが、戦後はほとんどこの初段、2段を見るのがなくなりましたね。第3段で舞台が日本へと移って、平安時代の京都は鳥羽天皇の御代という設定です。兄でありながら不吉とされた日蝕の日生まれであったために帝位につけなかった薄雲王子が謀反の心を抱くという話です。ちなみに日本は長子相続制ですが、モンゴルなどは末子相続制ですよ」

「かつて九尾の狐を退治した“獅子王の剣”というものが日本へ渡って、右大臣道春の館で守られていました。狐は退治されても退治されてもまた生まれ変わって女性に憑きます。右大臣道春の家で守られていた剣を、薄雲王子は謀反成功へのシンボルにしようと、家臣の金藤次に命じてこの剣を盗み出させます」

「3段目のクライマックスがこの道春館の段で、道春の後妻である萩の方のもとへ薄雲皇子の使いとして金藤次がやってきて、桂姫の身を渡せ、さもなくば首にして持っていくと無理難題を突きつけます。萩の方は、桂姫は実子ではなく義理の子であるということを明かします。江戸時代にはよくあったのでしょね、歌舞伎はそういった話が多いです。桂姫の代わりに、実子の初花姫を差し出すと言います。自分の娘なら殺してくれてもいいけど他人の娘は殺せないってことのようなのです。そこで2人の姉妹に双六(すごろく)をさせて、負けた方の首を打ったらいいということになり、2人の娘は死を覚悟した白装束姿で現れて、互いに自分が犠牲になろうと死ぬほうを争い、初花姫が負けます。負けた姫は自分が殺されるにも関わらず大喜びして、早くも手を合わせて首を打たれる姿勢をとる。ところが金藤次は勝負に勝った桂姫の首を取り、約束が違うと怒った萩の方と桂姫の恋人采女之助に真実を明かすことになる。桂姫こそ自分が捨てた娘で、育ての親への恩義のために初花姫を打たずに自分の捨てた我が娘である桂姫を打ったということをはっきりと明かにします。

「ここが有名なところで、悪人とはいえ浪人の自分を拾ってくれた主人の薄雲皇子を裏切ることもできず、一方で右大臣家の恩とも板挟みになって、哀れにも実の娘を犠牲にしてしまったのです」

「道春館の段では、金藤次が我が手で打った娘の首に“てて(父)じゃ”と語る場面が1番の聞きどころです。この“ててじゃ”をどういう風に語るか、歌舞伎ファンは見どころとして息をのんで見るわけですよ」

「せつかくですので、公演では見られない玉藻前旭袂の4段目と5段目のあらすじも教えていただきました。

「4段目は、同じく京の場面でございまして、神泉苑に面した御殿で道春の娘の初花姫は読みあげた歌が御心に叶って、玉藻前という名で側近として仕えるようになります。そこに金の毛をした九尾の狐が現れまして、帝の寵愛を受ける玉藻前に狙いをつけて玉藻前を亡き者にして偽玉藻前となってしまいました。インドや中国で国を滅ぼそうとした夢を日本で実現させようという狙いがこの話の設定であります。偽の玉藻前のところに薄雲皇子が現れまして、姉の桂姫から狙いを妹の玉藻前に変えたのですよ」

偽玉藻前は人間ではなく九尾の狐ですよと正体を明かし、日本を魔界にするため皇子と手を組むことになりました。

玉藻前はまず鳥羽天皇の後の皇后陛下になることを目指し、皇后となって天皇をたぶらかして退位させ、息子の薄雲皇子の世にして日本を混乱状態にするという目論見でした。狙い通り皇后の美福門院を退けて皇后の地位を手に入れます。恨みを晴らそうと美福門院と味方ら大勢が玉藻前の命を狙いますが、狐の魔力により玉藻前の体から光が発して大勢を全く寄せ付けません。これが旭袂の話なのです。戦前では、日章旗がわっと出てくるような演出もあったようです」

「5段目は鳥羽天皇が病のため、兄の薄雲皇子が代務を執っていたのですが、亀菊という女性を迎え入れて酒宴の毎日というありさまで公務が滞ってしまいます。そして、皇子は亀菊の心を買うため、帝の即位に必要な3種の神器の1つ八咫鏡を渡してしまい、裁判といった公務を亀菊が取り仕切ることになりました。前代未聞ですね。そして最後の祈りの段ですが、陰陽師の安倍康成というのがやってきまして、玉藻前が実は九尾の狐であるということが分かっていました。確信があった康成と弟の采女之助が現れて八咫鏡を受け取ります。3種の神器がなければ薄雲皇子は即位することができません。実は亀菊の父が皇子の家臣で、皇子を無反人にしないための働きだったのですが、無念に思った皇子は亀菊を惨殺してしまいます。康成は宮中に祭壇を設けて祈祷を行って玉藻前もここに参列するのですが、そこで康成が手にしていたのは獅子王の剣で、亀菊の父が皇子から預かっていたものが善人へ戻されておりましたので九尾の狐は全く歯が立たない。本性を現した九尾の狐は“那須野で人々をさらに苦しめる”というセリフを残して京都から飛び去ってしまいます。このあと那須野でも九尾の狐が大暴れするんですが、それは舞台にもなっております。化粧殺生石というのは5段目最後の番外編で、舞台は那須野が原。人々災いをなすと捨てゼリフを残した九尾の狐はすでに退治されておりましたが、亡霊となった狐が早変わり衣装をどんどん変えていく七変化をするのです。これも1つの見どころですね。歌舞伎では「外連(けれん)」というあっと驚くような演出が見どころで、これはいろいろな舞台で再現されることもありますが子ども歌舞伎や地下芝居ではなかなかできないかもしれないですね」

続けて、「墨染鬼三穂太郎譚」についてご解説がありました。

「これはあまり歌舞伎で有名な演目ではないのですが、地元の伝承を元にして作られていると思います。本日どのような解説があるか楽しみですね。三穂太郎の基本的なあらすじとしては、昔、この地を治める領主が菩提寺へ向かう山中で絶世の美女に会います。怪談の雪女と同じような題材でして、この美女は正体が蛇なのです。領主と夫婦になると男の子が生まれ、太郎と名づけられます。女房は乳を与えているところを決して覗いてはいけないと奥の納戸を締め切って乳を与えます。我慢しかねた領主がとうとう納戸を覗くと、部屋いっぱいにとぐろを巻いた大蛇が太郎を抱いて乳を与えていました。正体を見られた大蛇はもうこれ以上あなたのそばにはいられないと言って姿を消します。残された太郎は泣くばかりで、お母さんのお乳以外何も口にしません。困り果てた領主は太郎を抱いて女と出会った山中をさまよっていると、大きな滝壺から太郎を呼ぶ声がして、母親の大蛇が現れ太郎に五色の玉を渡します。大蛇にもらった玉を舐めて太郎はどんどん育っていきませんが、家よりも村一番の大木よりも奈義山よりも大きくなり、とうとう雲も突き破るような大男になります。大男の太郎は京都まで3歩で行けるので三歩太郎、三穂太郎という伝説ができました。

父の後を継いで領主になった三穂太郎のもとへ2人の女性が現れて、美しいサヨ姫と心根の優しいトヨタ姫に三穂太郎は迷いますが、心優しいトヨタ姫を妻に選びました。選ばれなかったサヨ姫が嫉妬し、三穂太郎のわらじに毒針を仕掛けるのです。蛇は金気に弱いと言われておりまして、小さな毒針のために五体が四散して死んでしまいました。

今際の喘ぎは現在の江戸風になって、体が分かれてそれぞれの神社に祀られていて、三穂太郎の足跡はため池となって各地に残り、飯に入っていたと言われる巨石や杖の跡なども多くの史跡として今でも語り継がれているということでございます」

谷一館長の解説のあと、いくつか質問がありました。

参加者「菅原道真が古典でよく取り上げられるのはなぜでしょうか」

谷一館長「菅原道真は太宰府天満宮にも祀られていますね。各地の天満宮で祀られていますが、優秀な人物であったのにその悲劇性が物語や伝説として残りやすかったのでしょう。日本人は判官(ほうがん)最良を好む傾向にありますので、道真は義経とは違うと思いますけれども、天神信仰や伝説を題材にした物語というのは優秀でありながら政略に巻き込まれて左遷され、都にも帰ることができず生涯を終えるという悲劇の主人公によく合ったのではないのでしょうか。長屋王のように一族皆殺しにされてしまうのとは違い、太宰府へ左遷されたという背景が信仰や伝説を生みやすかったのではないかと思います」

参加者「これから行く奈義現代美術館のような、現代アートというものの見方がいまいちわからないのですが、おさえておくべきポイントはあるでしょうか」

谷一館長「現代アートは考えるよりも体感するほうがいいでしょうけれど、美術の歴史は知っておくのもいいかもしれませんね。写真がなかった時代では、肖像画にしても風景画にしても現実にあるものをどういう形でその瞬間を残すかということがアートのひとつの大きな要素でした。写真がないと、綺麗な風景も王様の像にしても、感動をどう伝えどう残そうかを考える必要がありましたから。ところが、カメラができた途端にそれは大きく変わり、感動がそのまま写真で伝えられるようになったわけですからアートの意義が変わってきます。写真が登場したことで美術は大きな変化を迫られたのですね。それが要するに抽象へ変わっていき、アートが生き残るためには写真とは違うところでなにかを生み出さないといけないというのが現代美術となったわけです。現代アートを楽しもうと思ったら、これは何を表しているのだらうとか変な哲学的なことを考えず、気に入った造形や色彩、表現をみつけて、私はこういうものが好きだわというのを感じられたらいいのではないのでしょうか」



② 9:30 奈義町現代美術館に到着

入館前、学芸員の遠山さまに解説をいただきました。

「皆さん、改めましてこんにちは。本日はお越しいただきありがとうございます。

この美術館へ来られたことがある方いますか？ありがとうございます」（半数ほど挙手がありました）

「この美術館、実は今から30年前にできた美術館で今年が30周年ちょうどの年です。普通、美術館とは大原美術館のように絵画が飾ってあったり彫刻作品があったり、それを目で見えて鑑賞するというのが美術館の鑑賞体験だと思います。ですが、この美術館は空間の中に皆さんが入って、五感を使って全身で体感をするというような作品鑑賞体験が鑑賞方法になります。ざっくり言いますと、絵の中に皆さんが入って、その絵を全身で感じるというような感覚で見てもらえたらと思います。

このような体感型美術館としては、公共のものとしては世界で最初にできたのがこの奈義町現代美術館とされています。当時30年前なので、世界のどこにもこういう体感型の美術館はありませんでした。

当時、この美術館が完成した時の町人口が8000人弱で、そんな小さな町に世界のどこにもない美術館ができたわけですから、皆さん想像する通り大変色々な声がありました。それは喜ばしい歓迎の声だけではなくたのですが、この美術館を設計した世界的に有名な建築家の磯崎新さんが“時代に早すぎるものは、おそらく同時代には評価されないだろう。でも10年後、絶対に同じコンセプトを持った美術館が世界中に出来るから、そうすると奈義町はトップランナーになるよ”とってくださいました。そして本当に、直島の地中美術館ですとか、金沢21世紀美術館、青森県十和田市現代美術館ですとか、地方に同じコンセプトを持った美術館がどんどん生まれました。



当初は町の人口ぐらいの人（8000名程度）が来てくれればいような想定でしたが、どんどん来館者が増え始め、コロナ禍で1.5倍以上にお客さんは増えました。不思議な現象ですが、30年前からこの美術館は写真撮影可能にしている、時代とか関係なくそういうことを可能にしていた美術館なのですが、それがどんどん時代が追いついてって、インスタ映えみたいな形になって、若いお客さんがたくさん来るようになって、去年は3万4000人の方が1年間で来ました。3万4000人ってこの美術館の規模で言うるとすごい人数だねと言っていたら、この森の芸術祭がありまして、この時点での集計をしたら4万人を超えていました。今年、多分5万を超えると思っているのですが、それぐらいこの現代美術館のコンセプトが時代に合ってきた、時代が追いついたということだと思っています」



「磯崎新さんは奈義町に縁もゆかりもない建築家でしたが、なぜこの美術館をこの町に建てたかって非常によく聞かれますが、その正解が皆さんの目の前にあります。皆さんラッキーです。これだけ晴れている状況で見ていただくと一見してわかる、あの那岐山ですね。

田舎の町って結構暗かったり、山あいや谷あいにあるのでどんよりしたりしているイメージですが、奈義は全部平野です。ただ北側に分かりやすいように山があつて、那岐山の裾野から町が広がっています。空が高く開けていますし、山があつて、この自然の中で自分が今考えている自然っていうものも作品の一部としてみせるような美術館をこの町だったら実現ができそうだと磯崎さんは思われたようです。

そのような美術館について磯崎さんは第三世代美術館と名付けていたのですが、この町の自然も作品の一部として考えていただけたらと思います。自然が大事な美術館ですので、この美術館は3つの常設作品がありますが、それぞれ自然の名前がついています。大地と、月と、太陽。3つの自然の名前がついた空間があります。

まずワイヤーの作品があつて、それが宮脇愛子さんという女性の作家の「うつろひ」という作品になります。「うつろひ」という作品はタイトルが示すように、いろんなものの変化・移ろっていく様を見せている作品です。外の水エリアにありますが、雨が降ると水なので波紋になります。町は雪も降りますので、雪が降る時期になると水が凍って雪が積もります。真っ白になります。ワイヤーそのものっていうのは全く形も何も変わらないけれど、周囲の自然環境が変わることによって見え方が全く違う。まさに自然が移ろっていく様をそのワイヤーを通して体感するという非常によくできた作品です。宮脇さんの作品はスペインとかにもありますが、ヨーロッパの空で見る「うつろひ」と奈義の空で見る「うつろひ」は全然違うと思います。それはやっぱり気候風土が違えば、同じものでも違って見えるということで、奈義でしか見られない「うつろひ」になりますので、よかったらそれを体感していただけたらと思います。」



「次の作品は筒の中に入ることができます。あの中が展示室”太陽”で、荒川修作とマドリン・ギンズの作品です。あの作品がインスタ映えスポットとしてもものすごい人を集めている作品で、30年前は人が注目するものでもなかったですが、今は若い人がそうやって見て楽しんでいただけているっていうのは、30年前の考え方と若い人の心が今繋がっているような感じもあって面白いです。で、作品コンセプトは非常に難しいです。荒川修作とマドリン・ギンズの作品は現代美術史の中でも非常に難解と言われているので、意味を考えてしまうとものすごく難しいですが、難解な作品に若い人がたくさん来てインスタスポットとして来ていただけるっていうのは何かそこに秘密があると私は思います。良かったらその秘密みたいなものをまずは飛び込んでくる体感や感覚を大事にしてみてください。

芸術祭期間中は多くの子供たちも来館してくれていますが、小学生と話をすることで、小学生って結構最初の反応でああ思った、こう思ったってぱっと言葉にします。大人ってやっぱり知識があるので、なかなかこう言葉が出てこなかったりしますが、そういう風に子供の頃に戻っていたら、ぜひいろんな感覚や感想を言葉にさせていただいて、それを皆さんで共有していただけたらと思います」

「次は“月”の展示室になりまして、あそこの壁に展示してあるのが岡崎和郎という作家の HISASHI という作品です。岡崎さんもまた HISASHI というものをライフワークでずっと作り続けた作家で、最大のものがこの奈義町現代美術館にあります。HISASHI も作品の意図は難しいものがあります。ただ展示室「月」は、作品だけでなく空間そのものにも特徴があります。種明かしをすると、音がものすごく反響する部屋になっていまして、他のお客さんの迷惑にならないければ手叩いてみたり、ちょっと声出してみたりしてください。皆さん想像してる以上に音が反響します。音って目に見えないですよ。その目に見えない気配みたいなものも体感するような美術館になっていますので、それもぜひ鑑賞してみてください」

「今は森の芸術祭期間中ということで森の芸術祭の作品も説明させていただくと、水のエリア奥側に液晶パネルがあります。それが森の芸術祭の作品で、ちょっと音が聞こえるのがわかりますか？2023年に亡くなられた坂本龍一さんと、アーティストグループ「ダムタイプ」のメンバーでもあります高谷史郎さんという2人による作品《TIME-deluge》、それがこの音と映像の作品になります。



ゆっくりしたスローモーションの川の流れの映像、西洋楽器とは違う能管という和楽器独特の音階による音、それに「うつろひ」が風で揺れたりするその微妙な揺れと、それぞれのズレがすごく複雑に融合して、非常に心地の良いゆったりした、僕らが生きている時間・空間とはまた違うような時間・空間が体感できます。ゆっくり時間の許す限り体感していただけたらと思います。」



「ナギモカ前にて 人文知ポーズで記念撮影」



③ 集合写真 & 歌舞伎べんとう



「奈義町文化センター前、大井和西棚田にて 人文知ポーズで記念撮影」



手作り歌舞伎
べんとうは、
とっても美味しく
大好評でした♡



④15:20 美咲町大埴和西棚田 お お は が に し 農林水産省認定「日本の棚田百選」

農林水産省認定「日本の棚田百選」にも選ばれた中四国最大級の棚田です。

美咲町棚田保存地区連絡協議会公認ガイド宮尾さまと合流し、活動内容や棚田について解説をいただきました。

宮尾さま「本日はお越しくございありがとうございます。棚田でお米と葉タバコ(たばこの原料)とブロッコリーを作っています。

田んぼについてからおいおい話そうと思っておりますが、お米の品種は皆さんご存知のコシヒカリを作ってます。

それともう1つがきぬむすめで、最近の品種です。味はコシヒカリに劣らない品種です。暑さがいよいよ問題になっていまして、食味には関係しないのですが米の粒が濁っちゃうということがあります。近隣の地域では暑さに強い、にじのきらめきという品種のお米が作られています。まさに昨日ですね、宮中で新嘗祭が行われたのですが今年はそのお米を献上しました。岡山県で毎年どなたかが作っています。ニュースにもならないのですが、今年美咲町が選ばれて、その中で私がどうかということを探ねられたので、大変恐縮ながらもお引き受けしました」

棚田近くまで来ました。

「大きな池が見えると思いますけど、これは人造池ですね。戦後、棚田に引っ張る水を確保するためにつくって三方向に流れるようになっています。ポンプアップすれば電気代ですとか人件費もかかってきます。ですから、なかなか動かさないですが。それがなくても、元々棚田というのはほとんど天水で栽培されています。

ため池もそんなに使っていないですね」



「大井和は6つの地区がありまして、人口が約380名程度です。棚田のパフレットにも書かれていますが、約40ヘクタールの農地がありまして、現在耕作されているのが大体12ヘクタールです。だから3分の2ほどは荒れているということです。近年では、移住者の方が結構増えまして10組以上入られていると思います。外国人の方もおられます。私くらいの世代の方が結構多いのですが、家族で移住されたりとかこっちで子供が生まれたりとかで、お仕事は皆さんそれぞれ特徴がありますね。

自分でお家を直してパン屋さんを開いている方も、ヨガ道場でインストラクターとして活躍されている方もいらっしゃいます」

案山子がたくさん並んでいるスポットがありました。

「この田んぼの所有者の方が、趣味で案山子を作られています。ちょうど夕日が向こうに落ちるので、それを狙いに下まで降りて写真家の方がカメラを並べられていますね。インスタグラムでもよく取り上げられていますよ」

「お米の話で、私が作っているのは「コシヒカリ」と「きぬむすめ」というお話をしましたが、ほとんど皆さん「あきたこまち」を作られます。何故かと言えば「あきたこまち」は、早生品種で収穫が早いのです。だから夏は田んぼがよく乾くのです。だから作りやすいし早く作業を終わらせたいということで、「あきたこまち」を作られる方が結構多いです。

田んぼの管理で何が一番大変かということですが、管理は田んぼ1枚1枚に必要ですから大きくても小さくても同じような管理をしています。今は、やはりイノシシの被害がものすごいですね。それを防ぐために電気柵や金網、フェンスを国庫補助でつけたりしますが、やはり草刈りをしていないとそういうものを防げないですね」

参加者「棚田は梅雨や夏のイメージが強いですが、ここは秋冬でも日本昔話に出てくる里山のような風情が感じられて素敵ですね」

「この棚田の田んぼ12ヘクタールは、17件の農家で管理しています。田んぼをされない方も、地域の活動ということで道路端の草刈りですとか、公園の管理を定期的に行っています。町のみんなでこの棚田の景色を受け継いでいけたらいいなと思って活動していますし、もっとこの活動が伝えられるように自分でも何ができるかを考えていきたいと思っています」



地域のこういった活動や営みは、地元を大事にする思いと人情があったからこそ実を結び、未来へとつながるものだと学び、その尊さから感動の時をいただきました。

お世話になり、ありがとうございました。